九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

第二次世界大戦中のドイツ軍兵士の読書について：ナチスの文芸政策と娯楽的著作のかかわりに関する一考察

竹岡，健一

https://doi.org/10.15017/3053989

出版情報：九州ドイツ文学. 33, pp.59-78, 2019-10-30. 九州大学独文学会
バージョン：
権利関係：

第二次世界大戦中のドイツ軍兵士の読書について

── ナチスの文芸政策と娯楽的著作のかかわりに関する一考察 ──

竹　岡　健　一

1．先行研究の指摘

兵士の読書といえば、戦闘の合間の息抜きというイメージが強く、おのずと娯楽的な著作と結びつくのではないだろうか。実際、第二次世界大戦中のドイツ軍兵士の読書に関する先行研究においても、そのような見方が支配的である。例えば、『ヒトラー体制下の読書 第三帝国における作家、ベストセラー、読者』（2010年）において、1933年から1945年までの本の刊行数を主な拠りどころとして、第三帝国時代の文学の典型をなすのが民族主義的・国家主義的な著作ではなく、実録的著作や娯楽文学であることを際立たせ、「国家社会主義者らは独自の文学を創造するという計画にみごとに失敗したのだ」[1] と指摘するクリスティアン・アダムは、この時代のベストセラーの上位に多く含まれる娯楽的な読み物の需要が、第二次世界大戦の勃発を機に格段に高まったことを指摘している。つまり、戦争による「逃避的な読書」の必要性の増大は、「＜文化政策的で教育的な課題＞」から「軽い娯楽的な素材」[2] への後退を促したというのである。と同時に、アダムによれば、そうした「政治とかかわりのない、軽い読み物」[3] は、戦争中、政治的な著作に劣らず体制の安定に寄与した。つまり、気分転換と娯楽の機能を通じて、国民が英気を養い、民族の存在を懸けた戦いに力を注ぐことを助けたのである。

ところで、こうした第二次世界大戦中の娯楽文学の需要の増加には、銃後の国民の読書よりも前線兵士の読書が大きな契機となったと考えられている。ここで、この点で注目に値する言説を二つ引いてみたい。最初にあげるのは、一般に「前線書籍販売」(Frontbuchhandel) と総称される第二次世界大戦中のドイツにおける前線兵士向け書籍販売に詳しいエーデルガルト・ビューラーとハンス＝オイゲン・ビューラーの指摘である。『1939年から1945年の前線書籍販売：組織、管轄、出版社、書籍』（2002年）では、次のように述べられている。

> 第二次世界大戦中に兵士のために生産され、「銃後の国民」と戦う部隊に提供された本には、依然としてナチズムの洗脳を受けた文学という汚名がつきまとっている。だが、そこでは、とりわけ戦う部隊が英雄的精神や前線の轟を本のなかで追体験したくなかったということが、あっさりと見過ごされている。戦争とその残忍さを日々目の当たりにしている彼らには、第一次世界大戦の経験や、まさに今現在の戦争の出来事、あるいはゲルマン人の英雄や同時代の英雄に関する著作は、「精神の糧」としてはとて

も我慢できないものであった。帝国の公的機関、とりわけゲッベルスによって指揮された啓蒙宣伝省（RMVP）は、そのことにすぐ気がつき、国防軍総司令部（OKW）とともに、党やその様々な著作局の考えに反する文芸政策を実施した。[4)]

次に、ナチスの文芸政策と文化政策に詳しいヤン＝ペーター・バルビアンは、『ナチス国家における文芸政策 「統制」から破滅まで』（2010年）において、次のように述べている。なお、引用中に言及されているティースラー（Walter Tießler 1903－1984）は、ナチスの党官房で啓蒙宣伝省への情報連絡員を務めていた人物である。

啓蒙宣伝省とナチスの帝国宣伝指導部は、本のタイトルの選択にあたって、兵士らの文学の希望にできるだけ適切に応じるよう努めた。1941年から1942年の年末年始にナチス的啓蒙宣伝のための帝国連合によって実施された国防軍兵士への調査から、とりわけ探偵小説、カール・マイの小説か類似の冒険物語、および恋愛小説が好まれることが明らかになった。それゆえ、1942年２月、ティースラーはゲッベルスに、前線に供給する本の95％を娯楽的なものとするよう勧めた。残りの５％の本だけは世界観的な性格のものでなければならなかったが、それについても、「重たい食事ではなく、軽くてわかりやすい食事が与えられる」よう注意が払われねばならなかった。[5)]

このように、第二次世界大戦中のドイツ軍兵士の読書については、従来、娯楽的な読み物の需要がきわめて高く、それに応じて啓蒙宣伝省が娯楽文学を優先的に供給したことが指摘されており、それはナチスの文芸政策の破綻を示す一つの証左ともみなされている。こうした見方は、前線兵士が置かれている過酷な状況からして理解しやすいものであり、実際、以下でも触れるように、ゲッベルスを始めとする啓蒙宣伝省の関係者の発言や同時代の前線兵士向け書籍販売の報告に、このような見方と合致する内容を見出すことは、決して難しいことではない。にもかかわらず、詳しく検討していくと、多少なりとも異なる見方が入り込む余地があるように思われる。そこで、小論では、第一に前線でのドイツ軍兵士への本の販売に関する同時代の報告の内容、第二に啓蒙宣伝省の前線兵士向け推薦図書リストの内容と、同省が推進した野戦郵便による前線兵士への本の送付に応じて多数の出版社が刊行した野戦版と野戦郵便版の内容、そして第三に啓蒙宣伝省による娯楽文学の現状に対する不満と改善の試みを取り上げながら、前線兵士の読書の欲求に娯楽的著作への偏りを見ることが必ずしも妥当ではないことを明らかにし、ナチスの文芸政策と娯楽文学のかかわりについて考察するうえでの新たな手がかりを提示したい。

２．前線書籍販売の報告

そこで、先行研究の見方に対する反証として、最初に取り上げたい最も重要な資料は、第二次世界大戦中の前線兵士向け書籍販売に関する同時代の報告であるが、もちろん、そ

のなかには、上記のような娯楽的な読み物に対する前線兵士の欲求を裏づけるものもみられる。例えば、1941年に雑誌『新しい帝国における書籍商』に掲載された「西部戦線における書店」において、占領下のノルマンディーで書店員として勤務した一等兵ヴェルナー・エンスリーンは、次のように述べている。

> 特別な章をなすのは、サスペンス小説、未来小説、実話小説である。ドミニクであれエドムント・フィンケであれ、ウンガーの『ゲルマニン』であれシェンツィンガーの『メタル』であれ、これらの本は、補充がなされてから次の補充がなされるまで、決して足りることがなかった。そして、それはむろん自明のことであった。というのも、二度の見張りのあいだに、あるいはそれどころか二度のイギリスへの飛行のあいだに、だれもが集中と緊張を要求する偉大な小説や、それどころか詩と真剣に取り組みたいと思うわけではないからだ。[6)]

しかし、同時代の報告のなかには、これとは相反する内容のものもみられる。つまり、前線兵士の読書は娯楽的著作に偏っておらず、多様であり、名作や世界観的な著作にも高い需要がみられたといった指摘がなされているのである。ここでは、具体的な事例として二つの報告を取り上げる。初めにあげるのは、1944年にドイツ書籍商組合の機関誌『ベルゼンブラット』に掲載された記事「兵士は何を読むのか？　南東部戦線での前線書店の月間販売」である。執筆者である軍曹で士官候補生のアードルフ・ヴェーザーによれば、南東部におけるこの前線書籍販売は、12,000平方キロメートルに及ぶ地域の占領部隊と戦闘部隊を対象として、半分は1943年の８月から10月まで、残りの半分は12月に実施された。部隊が戦闘の任務の都合で常に移動しているため、販売にはトラックとモーターグライダーが用いられ、部隊が宿営している小村や、一部はかなり人里離れた場所にある基地で、全部で16日間にわたって充実した書籍の展示と即売が行われた。また、本は主に単体で販売され、興味のある兵士らが自ら本を選ぶことができ、部隊全体へのより大きな部数の一括販売は、ごく例外的にしかなされなかった。報告では、表１[7)]のような本の販売結果が示されている。表は大きく販売統計と在庫統計に分かれており、販売統計のほうは、a）の単体販売とb）の一括販売に分かれており、単体販売は、縦に「将校」、「軍曹と下士官」、「兵卒」という階級ごとの区分の後に、「総数」が示されている。一方、横には、ジャンルの区分が示されており、「政治、歴史、戦争など」、「文学、省察、哲学、精神史」、「ロマンス小説と郷土小説」、「サスペンス小説、旅行、民族学」、「ユーモア、気晴らし」、「自然、風土、芸術、画帳」、「職業、スポーツ、歌唱、軍事」の七つに分けられている。ヴェーザーは、この表の単体販売におけるジャンルと販売総数に基づいて、販売結果について次の三つの特徴を明らかにしている。

第一に、最初の四つの本のグループの割合がほぼ同じである。つまり、「政治、歴史、戦争など」（19.5％）と「文学、省察、哲学、精神史」（20.2％）のグループが、「ロマンス小説と郷土小説」（18.6％）のグループと「サスペンス小説、旅行、民族学」（18.1％）のグ

表1　アードルフ・ヴェーザーによる販売結果

販売統計 a）単体販売（自由に処理できる6,200冊の本の約半分までの公開販売）							
	政治、歴史、戦争など	文学、省察、哲学、精神史	ロマンス小説と郷土小説	サスペンス小説、旅行、民族学	ユーモア、気晴らし	自然、風土、芸術書、画帳	職業、スポーツ、歌唱、軍事
将校総数 364冊	80 22%	105 29%	55 15.1%	25 6.8%	28 7.7%	31 8.5%	40 10.9%
軍曹と下士官総数 928冊	213 23%	191 20.6%	169 18.2%	130 14.2%	66 7.1%	42 4.4%	117 12.6%
兵卒総数 2,348冊	457 17.9%	477 18.7%	493 19.3%	542 21.2%	232 9.1%	119 4.9%	228 8.9%
総数 3,840冊	750 19.5%	773 20.2%	717 18.6%	697 18.1%	326 8.5%	192 5.1%	385 10%
b）一括販売（将校によって部隊のために自由に選ばれた一括供給）							
総数 370冊	105 28.4%	111 30%	22 6%	54 14.6%	48 13%	20 5.4%	10 2.6%
在庫統計 a）タイトル							
総数 743 タイトル	182 24.5%	152 20.5%	151 20.3%	100 13.5%	59 7.9%	34 4.6%	65 8.7%
b）冊数							
総数 6,200冊	1,100 18%	1,330 21.4%	1,100 18%	1,200 19.1%	550 9%	270 4.3%	650 10.2%

ループと同様に、20％前後の割合を示している。これは、「兵士は息抜きと軽い娯楽のためにしか本を必要とせず、それゆえとりわけ探偵小説と恋愛小説とユーモアのある本を求めるという広く行き渡った考え方を否定」し、「兵士の精神的欲求がもっと釣り合いがとれた、多様なものである」[8] ことを明らかにしている。

第二に、最も頻繁に求められているのが、「文学、省察、哲学、精神史」のグループであり、20.2％を占めている。これは、「兵士は、一般に考えられているように第一に軽い、表面的な娯楽と楽しみを求めておらず、ある意味で時代を超えて通用する古典的な著作、練り上げられた著作を求めており」、「ごく限られた貴重な時間を割く価値のある本を手に入れたいと思っている」ことを示している。このように「兵士が生涯所有したいと思う本を、内面を豊かにし、＜心を落ち着ける＞ために、一度ではなく繰り返し読む本を求めている」ことは、「彼が特に求めているのが、息抜きと束の間の気晴らしではなく、むしろ精神的な深化であり、心の安定と精神の集中である」[9] ことを意味する。

第三に、「政治、歴史、戦争など」のグループの割合が、「文学、省察、哲学、精神史」に次いで２位（19.5％）であり、その差は0.7％に過ぎない。こうした「民族主義的に義務

づけられた著作」の読書は、「帝国の敵に対する反抗心と狂信的な抵抗力を最も容易に養うのに適して」おり、「ますます積み重なる幾多の攻撃に対して独自の政治的立場を強固にする」[10] ことに役立つ。

二つ目の販売報告は、ヴェーザーの報告に先立って、すでに1943年の『ベルゼンブラット』に掲載された記事「戦争５年目に私たちの兵士らは何を読むのか？」である。ここでは将校のルードルフ・シュトッフレーゲンが、少し前に自らが行ったある師団への本の販売の結果を報告している。詳しい地名は示されていないが、販売はトラックによって行われ、比較的大きな都市から片道２日間かかったという。そして、シュトッフレーゲンは、表２[11] のような販売結果を踏まえて、次の三点を指摘している。

表２　ルードルフ・シュトッフレーゲンによる販売結果

	a) 政治・戦争	b) 文学・省察	c) 恋愛小説	d) サスペンス小説	e) ユーモア	f) 自然とドイツの国々から
本の数	304	414	388	407	218	173
割　合	16%	21.7%	20.4%	21.3%	11.4%	9.2%

将校と兵卒への販売総数 ＝ 1904冊

第一に、本への関心は「釣り合いがとれた」ものとなっており、「兵士らが多面的に気晴らしをしようと試みている」[12] ことがわかる。

第二に、「文学・省察」グループの割合（21.7%）が最も高く、その後にようやく「サスペンス小説」（21.3%）と「恋愛小説」（20.4%）が続く。つまり、兵士は、「つかの間の短命な娯楽や楽しみに興じるだけでは決してなく」、「厳しい出撃の日々のあいだのごく限られた自由時間を捧げるに値する本を、最初の楽しみの後に、改めて心を豊かにし、内面的な落ち着きを取り戻すために、永遠に所有したいと思う本を望んでいる」[13] のである。

第三に、「政治・戦争」のグループに対する需要もかなり高い。販売全体の16%にあたる304冊で、第４位であり、「文学・省察」よりも5.7%少ないに過ぎない。政治的著作へのこの強い関心は、「文学への好みに表れている、真面目な内省への傾向と明らかに調和して」いる。つまり、「公然と歴史的＝政治的な本の肩を持つ兵士は、この点でもよく考えずにぶらぶらと日々を送ってはおらず」、「自らが積極的な戦士として関与している、諸民族のきわめて激しい戦いにおけるドイツ人の使命をはっきりと認識しようとしている」[14] のである。

こうしたシュトッフレーゲンの指摘は、ヴェーザーのそれとほぼ同様だといえ、やはり前線兵士がもっぱら娯楽的な本を求めたという従来の指摘とは異なる見方が提示されているといってよいであろう。

このように、同時代の前線書籍販売の報告の中には、娯楽文学の割合が圧倒的に多いという従来の見解が当たらないものが複数みられる。しかも、ヴェーザーとシュトッフレーゲンによる本の販売と報告はいずれも、ティースラーがゲッベルスに、前線に送る本の95%

を娯楽小説にするよう勧めたとされる1942年２月よりも後になされているのである。

３．前線兵士向け図書リストと野戦版・野戦郵便版

次に、啓蒙宣伝省が娯楽的著作の供給に積極的であったという指摘について考えてみたい。初めに、同省において前線兵士の読書における娯楽的著作の重要性が認められていたことを確認する意味で、ゲッベルスの1942年２月27日の日記の一部を引用する。

> 潜航艇のための私の援助活動が大きな規模で始まる。潜航艇の乗組員らはそれを受けるに値する。私はとりわけ、彼らが軽い娯楽文学を手に入れるよう配慮する。私は、私の協力者全員に、部隊の世話とドイツ国民の世話を理論からではなく実践から規定させるよう指示する。私たちのなかには、潜航艇の乗組員が、泥と油にまみれて機関室から出できたとき、『20世紀の神話』を手に取ることを最も好むと信じるイデオローグがまだいる。むろんまったくばかげたことだ。この乗組員は、内面的に少しもそれに従わず、決して世界観的な教えを受けたい気分ではない。彼は私たちの世界観を生きており、ことさらそれについて教えられる必要はないのだ。彼は息抜きを求めており、私たちは彼に、軽い種類の文学によって、軽いラジオ音楽やそれと似たようなものによって、息抜きの可能性を与えてやらねばならないのだ。私は、ラジオの指導においても、映画の指導においても、文学の指導においても、この目的を追求する。私たちは、戦争の後で、世界観的な種類の心構えについてまた語り合うことができる。今は、世界観は生きられるのであり、それゆえ教えられる必要はない。[15)]

前線兵士のあいだでの娯楽的著作の必要性に対する見解とともに、『20世紀の神話』の著者ローゼンベルクとの意見の違いも窺われ、興味深い記述といえよう。しかし、だからといって啓蒙宣伝省の政策が娯楽的著作一辺倒だったのかというと、必ずしもそうではない。この点で特に指摘したいのは、啓蒙宣伝省の前線兵士向け推薦図書リストと、前線兵士向けに多数の出版社が刊行した野戦版と野戦郵便版が、必ずしも娯楽的な内容に偏っていないことである。

そこでまず、前線兵士向け図書リストに目を向けてみよう。啓蒙宣伝省は、1939年から1941年にかけて、野戦郵便による前線への本の送付を呼びかけ、同省に属する「ドイツ的著作のための宣伝・助言局」（Werbe- und Beratungsamt für das deutsche Schrifttum）によって編集された『野戦郵便図書リスト』（*Buchfeldpostlisten*）を４巻刊行した。全体でおよそ1500タイトルを含むこれらのリストは、書籍販売にとっても本の購買者にとっても重要な指針となったが、これらのうち全内容を確認できる第１巻と第３巻について、項目とタイトル数、およびその割合をみると、表３[16)]と表４[17)]のようになる。

第１巻をみると、ローマ数字のⅡの「文学と娯楽」の項目は全体でも48％と半数以下で、「ユーモア」に限定すれば８％に過ぎない。また、第３巻では、文学に該当する「娯楽と省

表３　野戦郵便図書リスト（第１巻）の項目とタイトル数

項　　目	タイトル数	割合（%）
Ⅰ．世界観と政治	225	37
1．総統	7	1
2．党と国家	14	2
3．四か年計画、労働、経済、および交通	25	4
4．国防と軍人	58	9
5．ポーランドでの勝利	10	2
6．イギリスに対する戦い	22	4
7．植民地の歴史と植民地政策	19	3
8．世界政策	18	3
9．政治と歴史	30	5
10．世界観、科学、および文化政策	22	4
Ⅱ．文学と娯楽	300	48
1．詩	26	4
2．小説と物語	203	33
3．ユーモア	52	8
4．翻訳	19	3
Ⅲ．文化と自然	99	15
1．芸術、音楽、文学史	30	5
2．地域の表情	20	3
3．スポーツ	13	2
4．狩猟と動物	14	2
5．広い世界	15	2
6．教訓	7	1
合　　計	624	100

表４　野戦郵便図書リスト（第３巻）の項目とタイトル数

項　　目	タイトル数	割合（%）
1．政治と経済の力の場	20	6
2．不滅の軍人	57	17
3．娯楽と省察のために　すべての人のための小説	69	20
4．ごく手短に　小さな物語	68	20
5．背嚢のための知恵　すべての人生の状況のための偉人の思想と名言	7	2
6．楽しい時間のために　陽気な小説と物語	33	10
7．異国の土地に流れるドイツ人の血　ドイツの植民者の運命	13	4
8．犯人はだれだ？　わくわくする探偵小説	16	5
9．冒険と旅　全世界からの報告と物語	30	9
10．運動家と狩猟家のために　記録の世界と自然の生活から	23	7
合　　計	336	100

察のために　すべての人のための小説」、「ごく手短に　小さな物語」、「背嚢のための知恵すべての人生の状況のための偉人の思想と名言」、「楽しい時間のために　陽気な小説と物語」、「犯人はだれだ？　わくわくする探偵小説」を合わせると57％にはなるが、そのすべてが娯楽文学とは限らず、明らかに「ユーモラスな」作品が集められている最後の２項目に限定すれば15％に過ぎない。他方で、第１巻で、ローマ数字のＩの「世界観と政治」が37％に上り、第３巻でこれに該当する「政治と経済の力の場」、「不滅の軍人」、「異国の土地に流れるドイツ人の血　ドイツの植民者の運命」の合計が27％に上ることも考慮されねばなるまい。その他、文化や自然、スポーツといったものにも、第１巻で15％、第３巻で16％が配分されている。このようにみれば、『野戦郵便図書リスト』が娯楽文学に偏っているとはいえないであろう。これを裏書きするように、1941年の『ベルゼンブラット』に掲載された記事「前線に本を送れ　野戦郵便図書リスト第３巻とそれと結びついた宣伝行動の概観」において、著者のクーノ・フェルヒナーは、「ここには、私たちの国民軍の構成に応じて、きわめて広い基盤の上に、すべての読者層と読者の願望に合う本が選び出されている」[18] との見解を示している。また、ハンス＝オイゲン・ビューラーとクラウス・キルバッハも、『野戦郵便図書リスト』は全体として「政治的・世界観的文学と戦争に関する著作、ならびに退屈しのぎの文学と省察的な文学を混ぜ合わせたもの」[19] と評している。なお、図１[20] は、第１巻の表紙である。

もちろん、『野戦郵便図書リスト』の刊行は1942年２月より前のことである。では、開戦とほぼ同時に刊行が始まり、戦争中を通じて実際に生産・販売された「野戦版」（Feldausgabe）と「野戦郵便版」（Feldpostausgabe）はどうだろうか。これらの本は、開戦後間もなく、前線兵士向けの本の需要を把握した出版社が、自社の本を野戦郵便を利用して無料で送付できる大きさと重さで刊行したものであり、1942年からは啓蒙宣伝省の「野戦郵便特別行動」（Sonderaktion Feldpost）によっていっそう促進された。関与した出版社は少なくとも70以上にのぼるが、おおよその刊行数が明らかにされている出版社は71であり、そのうち著者とタイトルの詳細が確認されるのは、表５[21] にあげた九つの出版社に留まっている。ただし、71の出版社の刊行数の総計が47,630,000冊と見積もられるのに対し、これら九つの出版社の刊行数の総計は、特に刊行数が多い出版社が含まれていることから32,230,000冊にのぼり、全体の68％程度を占める。[22] したがって、これらの出版社が刊行したタイトルは、野戦版と野戦郵便版で刊行された本の傾向をかなり高い度合いで示しているとみなしてよいであろう。なお、図２[23] は、「インゼル文庫」（Insel-Bücherei）の野戦郵便版の第１巻であるリルケの『旗手クリストフ・リルケの愛と死の歌』（*Die Weise von Liebe und Tod des Cornets Christoph Rilke*）の表紙である。

図１

表５　著者・タイトルが確認される野戦版・野戦郵便版

ベルテルスマン社 C. Bertelsmann
・野戦版 Die Feldausgaben ○ ・野戦郵便小冊子 Die Feldposthefte ○ ・「小さな野戦郵便シリーズ」Die Kleine Feldpost-Reihe ○
書誌学研究所 Das Bibliographische Institut
・野戦郵便版 Feldpostausgaben ・「マイアー図版入り小冊子」>Meyers Bild-Bändchen<
エーア社 Der Zentralverlag der NSDAP Franz Eher Nachf.
・「兵隊＝僚友」>Soldaten-Kameraden< ○ ・「フェルキッシャー・ベオーバハター野戦郵便」>Völkischer Beobachter-Feldpost< ○
バイエルン・オストマルク大管区出版社 Gauverlag Bayrische Ostmark
・「バイロイト野戦郵便版」>Bayreuther Feldpostausgaben< ・「小さな鐘文庫」>Kleine Glockenbücherei<
インゼル社 Der Insel-Verlag
・インゼル文庫野戦郵便版 Feldpostausgaben der Insel-Bücherei ○
ランゲヴィーシェ社 Karl Robert Langewiesche
・ランゲヴィーシェ野戦郵便版 Feldpostausgaben von Langewiesche
レクラム社 Philipp Reclam jun.
・レクラム百科文庫 Reclams Universal-Bibliothek ○ ・「レクラム小冊子シリーズ」>Reclams Reihenbändchen<
フェルハーゲン＆クラーズィング社 Velhagen & Klasing
・「野戦郵便読書冊子」>Feldpost-Lesebogen< ・野戦郵便版 Feldpostausgaben
リュッテン＆レーニング社 Rütten & Loening
・寂寥の慰め Trösteinsamkeit ・ドイツ詩の永遠の宝物から Aus dem ewigen Schatz deutscher Lyrik ・野戦郵便版 Feldpostausgaben ○（一部）

○はおおよその刊行数が明らかであることを示す。

そこでまず、これら九つの出版社の計18のシリーズにおいて、取り上げられた回数が特に多い作家に注目してみたい。著者名が明らかでない作品を除くと、これらのシリーズに含まれる作家は294名になり、取り上げられた回数は表６[24]のようになるが、全体のほぼ３分の２の作家が１回しか取り上げられていないのに対し、２回以上取り上げられた作家は３分の１であり、複数回取り上げられている作家はある程度限定されていることがわかる。ここで、４回以上とりあげられ、上位の約１割を占める32名の名を、野戦版と野戦郵便版を代表する作家としてあげれば表７[25]の通りであるが、大きく二つの傾向に分けられることがわかる。一つは、ナチス時代以前から読み継がれている古典的な作家であり、回

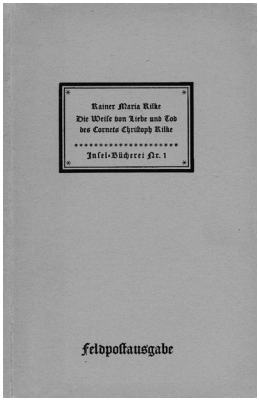

図２

表６　表５の野戦版・野戦郵便版で作家が取り上げられた回数

回数	人数	割合（%）
21	1	11
14	1	
8	2	
7	2	
6	3	
5	11	
4	12	
3	23	23
2	44	
1	195	66
合計	294	100

表７　表５の野戦版・野戦郵便版で取り上げられた回数が特に多い作家

21回	Theodor Storm
14回	Gottfried Keller
8 回	Wilhelm Busch　Heinrich von Kleist
7 回	Joseph von Eichendorff　Adalbert Stifter
6 回	Friedrich Joachim Klähn　C. F. Meyer　Eduard Mörike
5 回	P. C. Ettighoffer　Theodor Fontane　Friedrich Gerstäcker　Hermann Gerstner　Hans Grimm E. T. A. Hoffmann　Wilhelm Heinrich Riehl　Gustav Schröer　Will Vesper Andreas Weinberger　Tüdel Weller
4 回	Rudolf G. Binding　Hans Friedrich Blunck　Hermann Eris Busse　Louise von François Johann Wolfgang von Goethe　Heinrich Luhmann　Martin Luserke　Melchior Meyr Fritz Müller-Partenkirchen　Otto Paust　Karl Schworm　Heinrich Zschokke

数の多い順に、テオドーア・シュトルム、ゴットフリート・ケラー、ヴィルヘルム・ブッシュ、ハインリヒ・フォン・クライスト、ヨーゼフ・フォン・アイヒェンドルフ、アーダルベルト・シュティフター、C・F・マイアー、エードゥアルト・メーリケ、テオドーア・フォンターネ、フリードリヒ・ゲルシュテッカー、E・T・A・ホフマン、ヴィルヘルム・ハインリヒ・リール、ルイーゼ・フォン・フランソワ、ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ、メルヒオル・マイアー、ハインリヒ・チョッケの16名が該当する。全体として、ロマン主義から詩的リアリズムにかけての作家が多いことが特徴であり、特にシュトルムとケラーの回数は突出している。もう一つは、ナチス的な作家であり、フリードリヒ・ヨアヒム・クレーン、P・C・エッティヒホッファー、ヘルマン・ゲルストナー、ハンス・グリム、グスタフ・シュレーエア、ヴィル・フェスパー、テューデル・ヴェラー、ルードルフ・G・ビンディング、ハンス・フリードリヒ・ブルンク、ハインリヒ・ルーマン、フリッツ・ミュラー＝パルテンキルヒェン、オットー・パウスト、カール・シュヴォルムの13名

である。また、これら32名の作家のなかにあえてユーモア作家を指摘するなら、ミュラー＝パルテンキルヒェンであろうか。このように取り上げられた回数からみれば、野戦版と野戦郵便版を代表する作家は、古典的な作家とナチス的な作家だといえるのである。

しかし他方で、作品の刊行数に目を向けると、こうした見方には一定の修正が必要となる。表５にあげた出版社・シリーズのうち、個々の本の刊行数が確認されるのは、○印を付した八つに過ぎないが、刊行数の多いシリーズが含まれていることから総計は28,630,000部となり、全体のおよそ60％を占めるため[26]、ある程度全体の傾向を捉えるに足ると思われる。そこで、上記294名の作家について、それぞれの作品の総刊行数がこれらのシリーズに占める割合を示すと表８[27]のようになるが、全体のほぼ３分の２の作家の作品の刊行数が10万部未満なのに対し、10万部以上の作家は３分の１であり、刊行数が多い作家もある程度限定されていることがわかる。ここで、作品の総刊行数が30万部以上であり、上位１割を占める28名を野戦版と野戦郵便版を代表する作家としてあげれば表９[28]の通りであり、取り上げられた回数の場合と同様に大きく二つの傾向に分けられるが、違いもみられる。まず、古典的な作家としてはシュトルム、ケラー、ブッシュ、ゲーテ、フリッツ・ロイターの５名があげられる。もう一つはナチス的な作家であり、取り

表８　表５の野戦版・野戦郵便版における作家の総刊行数

部　　数	人数	割合（％）
140万部～150万部未満	1	10
110万部～120万部未満	1	
90万部～100万部未満	2	
80万部～90万部未満	1	
70万部～80万部未満	3	
60万部～70万部未満	2	
50万部～60万部未満	5	
40万部～50万部未満	5	
30万部～40万部未満	8	
20万部～30万部未満	17	22
10万部～20万部未満	49	
10万部未満	200	68
合　　計	294	100

表９　表５の野戦版・野戦郵便版で総刊行数が特に多い作家

1,450,000部	Johannes Banzhaf
1,155,000部	○ Theodor Storm
90万部～100万部未満	○ Friedrich Joachim Klähn ○ P. C. Ettighoffer
80万部～90万部未満	○ Otto Paust
70万部～80万部未満	○ Gottfried Keller ○ Hermann Gerstner ○ Hans Grimm
60万部～70万部未満	○ Tüdel Weller ○ Gustav Schröer
50万部～60万部未満	○ Martin Luserke ○ Wilhelm Busch Florian Seidl ○ Andreas Weinberger Hans Zöberlein
40万部～50万部未満	Georg von der Vring Hannes Kremer ○ Will Vesper Walter Best Otto Brües
30万部～40万部未満	August Winnig ○ Karl Schworm Heinz Steguweit Willy Hans Bannert ○ Johann Wolfgang von Goethe Fritz Reuter ○ Fritz Müller-Partenkirchen Erhard Wittek

○印は回数でも上位の作家を示す。

上げられた回数の多い作家として名のあがったクレーン、エッティヒホッファー、パウスト、ゲルストナー、グリム、ヴェラー、シュレーエア、フェスパー、シュヴォルム、ミュラー＝パルテンキルヒェンに、フロリアン・ザイドゥル、ハンス・ツェーバーライン、ゲオルク・フォン・デア・ヴリング、ハンネス・クレーマー、ヴァルター・ベスト、オットー・ブリューエス、ハインツ・シュテーグヴァイト、エアハルト・ヴィッテクを加えた18名が該当する。したがって、全体としては取り上げられた回数の多い作家と重なる作家が少なくないものの、作品の版数から観た場合には、古典的な作家は少なく、ナチス的な作家が大勢を占めていることになるのである。ただし、シュトルムの総刊行数がナチス的な作家のそれよりも高いことは、やはり注目に値しよう。と同時に、ここでもう一つ注目しなければならないのは、ユーモア文学のアンソロジーを３冊編んでいるヨハネス・バンツハーフが第１位で、他を大きく引き離していること、つまりユーモア文学も決して引けを取ってはいないことである。そして、この点でさらに指摘されねばならないのは、総刊行数の点で上記の作家と同等かそれ以上の作品が他にもみられることである。それは、表10[29]にあげた、ナチスの中央出版社であるエーア社から刊行された「フェルキッシャー・

表10　「フェルキッシャー・ベオーバハター野戦郵便」の作品と刊行数

今日もまだ笑える　兵士が語る愉快な体験談 *Darüber lache ich noch heute. Soldaten erzählen heitere Erlebnisse*	2,600,000
兵士の日常　*Soldaten-Alltag*	2,100,000
攻撃と野営で　*Im Angriff und im Biwak*	1,200,000
兵士があれを笑う　*Darüber lacht der Soldat*	1,000,000
合　　計	6,900,000

ベオーバハター野戦郵便」の４巻である。図３[30]は、第３巻『今日もまだ笑える　兵士が語る愉快な体験談』(*Darüber lache ich heute noch. Soldaten erzählen heitere Erlebnisse*) の表紙であるが、総刊行数が6,900,000部に達し、それだけで野戦版と野戦郵便版の総刊行数の14％に相当するこのシリーズは[31]、いずれも前線兵士の愉快な体験談を集めたものである。さらに、ユーモア文学としては、ミュラー＝パルテンキルヒェンとロイターも忘れてはなるまい。特にミュラー＝パルテンキルヒェンについては、バンツハーフのアンソロジーのうち１冊もこの作家の作品集『ミュラー＝パルテンキルヒェンの書』(*Müller-Partenkirchen-Buch*) となっているのである。このようにみると、刊行数の点では、野戦版と野戦郵便版を代表するジャンルは、古典的文学、ナチス文学、およびユーモア文学だといえるのである。

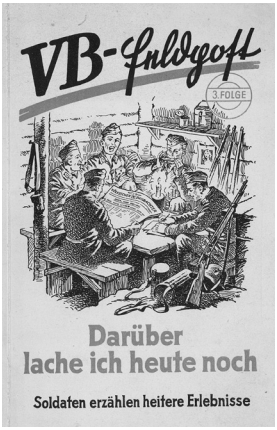

図３

なお、以上のような結果は、1943年９月13日に『ベルゼンブラット』に掲載された記事「軍服のポケットのなかの小さな本　野戦郵便版の偉業」において、野戦郵便版が「精神への兵士の空腹の両極性」に応じて、「軽い娯楽文学」と「高尚な文学」に「均等に」[32] 配慮していると指摘されていることとも合致する。著者のベルンハルト・レシェンコールは、野戦郵便版の全体的な特色について、次のように述べる。

> 戦いの時間、または長く続く休憩の時間は、両方の文学的内容を復権させる。そのため、あの野戦郵便版で把握されている著作の境界標柱は、間隔がかなり広くとられねばならない。ヘルダーリンとカロッサの抒情詩が一方の極を形成し、もう一方の極を、ハインリヒ・シュペールのような人の着想豊かなユーモアまたはフレート・エンドリカートの寄席芸術が形成する。
>
> 個々の出版社のシリーズに列挙されている名前を数え上げることは、同時代の文学的創作の断面を示すことになるが、また古典的な文学の断面や――ゲーテの『ノヴェレ』との出会いが喜ばしい――、E. T. A. ホフマン、フォンターネ、シュティフター、ラーベ、ケラー、シュトルム、メーリケなどの名前が輪郭を描くような、あるいはゲルシュテッカー、ポストル＝シールズフィールド、およびカール・マイの世界的な冒険性のなかに刻み込まれているような、19世紀の偉大な小説家の作品の断面も示すことになる。ライナー・マリーア・リルケとヨーゼフ・ヴァインヘーバーの抒情詩と並んで、ヴィルヘルム・シェーファー、ハンス・グリム、マルティン・ルーゼルケ、パウル・エルンスト、ヘルマン・シュテーア、ヨーゼフ・ポンテンといった人のノヴェレもみられる。[33]

ここでも古典的な文学、ナチス的な文学、および娯楽文学の三者がほぼ同等に存在していることが確認されているが、それは啓蒙宣伝省による娯楽文学の優先的供給という先行研究の指摘と矛盾し、冒頭に引用したティースラーの助言どおりにはことが運ばなかったことを推察させるのである。

４．娯楽的著作の現状に対する批判

啓蒙宣伝省が娯楽的著作の供給に積極的であったという先行研究の指摘と矛盾するもう一つの事項として、最後に、同省の関係者のもとで、娯楽的著作の現状が肯定的に捉えられず、より質の高いナチス的な娯楽的著作の創出が模索されていたことを指摘したい。

例えば、啓蒙宣伝省の著作部門の主任ヴィルヘルム・ヘーゲルトは、1940年の書籍商組合の総会での挨拶のなかで、「イギリスの探偵とイギリスの慣習を賛美することを課題としたと思われる探偵小説」[34] を批判したうえで、次のように述べている。

> 私たちは、深い感銘を与える質の高い作品にたっぷりと恵まれており、同様に、価

値の低い浅薄な娯楽文学にも豊富に恵まれている。しかし、残念ながら、私たちにはよいドイツ的な娯楽小説が欠けている。翻訳に対する関心は、私たちの民族同胞の単なる流行病ではなく、すでに言及した欠乏に基づいている。ドイツの出版業者はまさに、きわめて大量の翻訳を刊行することでこの欲求に応じたのだ。(強調は原文)[35]

こうしたヘーゲルトの言説と呼応するように、啓蒙宣伝省の著作部門の係官主任であるルードルフ・エルクマンも、1941年にライプツィヒで開催された書店主集会で文芸出版社の労働共同体を前に行った演説「私たちの著作の問題と課題」において、開戦以後の娯楽文学の需要の高まりに乗じた「娯楽的な商品」[36] の生産の増加を憂慮して、次のように述べている。

私たちは基本的に、よい娯楽的著作を是認する。だが、私たちは、完全に大量消費に合わされた粗悪な娯楽的著作は否定する。必要な発展の目標として私たちの念頭に浮かんでいるのは、著名な作家がもっと大きな規模で折に触れて取り組むべき芸術的な娯楽的著作が徐々に普及し、それ自体は肯定されるべき広い読者層の欲求をますます大きな規模で満たすことである。[37]

そして、このような現状認識に基づいて、啓蒙宣伝省では、より質の高い娯楽的著作の創出が模索されていた。そのための手段は種々考えられていたが、その一つは、エルクマンもいうように、著名な作家に娯楽的著作の執筆を促すことであった。これについて、ゲッベルスは、1942年10月11日にワイマールで開催された詩人集会での講演「武器の騒音のなかにあるドイツの著作」において、次のように述べている。

私たちは、私たちの古典作家の物語作品のなかに、筋と言葉が注意深く形づくられた最良の娯楽文学のあらゆる長所が一つになった例を数多く見出す。これらの物語こそまさに、開戦以来、国防軍と故国の国民から繰り返し求められているものである。最近、ますます多くの同時代のドイツの詩人がこの課題と取り組み、素晴らしい成功を収めるようになった。しかし、彼らのなかには、軽い娯楽的な種類の本を書くことは彼らの沽券にかかわり、彼らの役割ではないと考える者が少なくない。

これについては、ナチス国家ではすべての課題が国民に由来し、すべての文化的成果はドイツ国民が賛意を示すことによって価値を得るのだといわなければならない。ドイツの詩人は、今後、純粋な文学の偉大な作品と並んで、休養のわずかな時間を素朴なやり方で心地よいものにし、満足させる本を国民に贈ることを名誉と考えねばならないのだ。[38]

この会議では、ヘーゲルトも、娯楽という「私たちの民族にとってきわめて重要な領域」は、もはや「いかさま師に委ねられたままであっては」ならず、「真の詩人が」[39] そのため

に努力しなければならないとの見解を表明しているが、このような考え方には、「バッハ、モーツアルト、ハイドンといった古典的な時代の偉大な作曲家たち」が、「誤った功名心を持たず」、「偉大な作品とならんで機会音楽を」、つまり「とても健全で、形式的に質が高いと同時にわかりやすく、しかも価値の高い娯楽音楽」[40] を創作するよう努めたことが模範となっていたようである。また、こうして創作される「＜新しいドイツの娯楽小説＞」が、「政権によって宣伝された人種的・風俗的なおきてが勝利した」、「階級のないドイツ人の＜民族共同体＞を示し」、「ナチスの思想の受け入れを促進する」[41] ものでなければならなかったことは、いうもでもない。例えば探偵小説であれば、「世界最良の刑事警察」が「スコットランドヤード」ではなく「ベルリンにある」[42] ことを示さねばならなかったのである。

とはいえ、こうした政策は結局のところ奏功せず、「よりよく、より相応しい種類の娯楽小説を産む」[43] には至らなかった。例えば、1944年に『図書研究』（*Bücherkunde*）に掲載された記事「戦争におけるキッチュ」において、ゲルト・ヴンダーは、「こうして、私たちはドイツに、味気ないつかの間の食事の水準を上回る探偵小説をまだ見出せないのだ」[44] と嘆いている。したがって、アダムのいうように民族主義的・国家主義的な著作よりも娯楽文学のほうがが大きな成功を収めたという意味においてよりも、むしろナチス的な意味でのよりよい娯楽文学の創造が達成されなかったという意味で、まさにナチスの文芸政策は失敗したといえるのかも知れない。いずれにせよ、啓蒙宣伝省としては、単に国民に娯楽的な読み物を与えておけばよいと考えていたわけではなく、ナチズムの理念と合致する質の高い娯楽文学の創造を目指していたのである。

5．おわりに

初めに述べたように、第二次世界大戦中のドイツ軍兵士の読書については、先行研究において、娯楽的な読み物の需要が著しく高く、それに応じて啓蒙宣伝省が娯楽的な著作を優先的に供給したことが指摘されており、それはナチスの文芸政策の破綻を示す一つの証左ともみなされている。だが、以上の考察を踏まえれば、こうした定説には一定の修正が必要だと思われる。

まず、前線兵士に供給された本の内容については、そのほとんどが娯楽文学であったという指摘は当たらず、ナチス文学と高尚な文学も一定の割合を占めていたことが、統計上裏付けられた。とりわけ高尚な文学が娯楽文学とナチス文学を凌ぐほどの重要な地位を占めていたことは、従来ほとんど指摘されて来なかったという意味で、注目に値する。この点で特に印象深いのは、野戦版と野戦郵便版においてシュトルムをはじめとする詩的リアリズムの作家がきわめて高い受容をみていたことであろう。つまり、戦闘の合間の兵士に最も必要とされたのは、静かな内省へと誘うような文学であったと推察されるのである。

次に、ナチスの文芸政策が破綻したという指摘については、依然として維持され得るように思われる。ただし、その根拠は、定説のいう娯楽文学の著しい需要と供給にではなく、ナチス文学が一定の割合を占めているとはいえ、その重要性がそれほど高く評価されない

ことにある。この点については、最も刊行数の多い娯楽的著作がエーア社から刊行されたところに、ナチスの文芸政策本来の世界観的な在り方からの後退が窺われることや、ナチス的な娯楽文学の創出が失敗に終わったことも併せて考慮されねばなるまい。

このような意味で、前線兵士の読書やそれとかかわるナチスの文芸政策、およびそこで文学作品が果たした役割については、今後よりいっそう詳しい検討が求められるのである。

本研究は、日本学術振興会科研費助成事業（基盤研究（C）、課題番号：17K02621）の助成を受けたものである。また、小論は、日本独文学会春季研究発表会における口頭発表「第二次世界大戦中のドイツ軍兵士の読書について」（2019年６月８日 於学習院大学）の原稿に加筆修正したものである。

注

１）Christian Adam: *Lesen unter Hitler: Autoren, Bestseller, Leser im Dritten Reich*. Berlin: Galiani 2010, S. 318. なお、本書については、次の拙評も参照。竹岡健一：Christian Adam: *Lesen unter Hitler: Autoren, Bestseller, Leser im Dritten Reich*（日本独文学会機関誌『ドイツ文学』第114号、2012年、218～223頁）。

２）Ebenda, S. 320.

３）Ebenda, S. 321.

４）Edelgard Bühler/Hans-Eugen Bühler: *Der Frontbuchhandel 1939–1945: Organisationen, Kompetenzen, Verlage, Bücher: eine Dokumentation*. Frankfurt am Main: Buchhändler-Vereinigung 2002, S. 5.

５）Jan-Peter Barbian: *Literaturpolitik im NS-Staat. Von der„Gleichschaltung“ bis zum Ruin*. Frankfurt am Main: Fischer Taschenbuch Verlag 2010, S. 366.

６）Werner Enßlin: *Frontbuchhandlung im Westen*. In: *Der Buchhändler im neuen Reich*. 1 (1941), S. 17. Zitiert nach Christian Adam: a. a. O., S. 303.

７）表１の典拠は次の通りである。Adolf Weser: *Was liest der Soldat? Der Monatsverkauf einer Frontbuchhandlung im Südosten*. In: *Börsenblatt für den Deutschen Buchhandel* (=*Bbl.*) 27 (1944), S. 53–56 mit 1 Tab., hier S. 54.

８）Ebenda, S. 55.

９）Ebenda.

10）Ebenda.

11）表２の典拠は次の通りである。Rudolf Stoffregen: *Was lesen unsere Soldaten im fünften Kriegsjahr?* In: *Bbl.* 177 (1943), S. 207f., hier S. 207.

12）Ebenda.

13）Ebenda.

14）Ebenda.

15）Elke Fröhlich (Hrsg.): *Die Tagebücher von Joseph Goebbels*. Teil Ⅱ Diktate 1941–1945. Band 3 Januar–März. München u. a.: K. G. Saur 1994, S. 381f.

16）表３の典拠は次の通りである。Werbe- und Beratungsamt für das deutsche Schrifttum bei Reichsministerium für Volksaufklärung und Propaganda (Hrsg.): *Sendet Bücher an die Front! 1. Folge*. Leipzig: Poeschel & Trepte 1939.

17）表４の典拠は次の通りである。Werbe- und Beratungsamt für das deutsche Schrifttum bei Reichsministerium für Volksaufklärung und Propaganda (Hrsg.): *Sendet Bücher an die Front! 3. Folge*. Leipzig: Poeschel & Trepte 1941.

18）Kuno Felchner: *Sendet Bücher an die Front. Ein Überblick über die Dritte Buch-Feldpostliste und die damit verbundene Werbeaktion*. In: *Bbl.* 59 (1941) , S. 88–90, hier S. 89.

19）Hans-Eugen Bühler/Klaus Kirbach: *Die Wehrmachtsausgaben deutscher Verlage von 1939–1945. Teil 1: Feldpostausgaben zwischen 1939 und 1945 und die Sonderaktion Feldpost 1942*. In: *Archiv für Geschichte des Buchwesens*. Nr. 50. Frankfurt am Main: Buchhändler-Vereinigung 1998, S. 251–298, hier S. 254.

20）Werbe- und Beratungsamt für das deutsche Schrifttum bei Reichsministerium für Volksaufklärung und Propaganda (Hrsg.): *Sendet Bücher an die Front! 1. Folge*. Leipzig: Poeschel & Trepte 1939, Titelseite.（筆者複写所蔵）

21）表５の典拠は次の通りである。Edelgard Bühler/Hans-Eugen Bühler: a. a. O., S. 133–183; Saul Friedländer/Norbert Frei/Trutz Bendtorff/Reinhard Wittmann: *Bertelsmann im Dritten Reich*. München: C. Bertelsmann Verlag 2002, S. 416.

22）この数値の典拠は次の通りである。Edelgard Bühler/Hans-Eugen Bühler: a. a. O., S. 260–262.

23）Rainer Maria Rilke: *Die Weise von Liebe und Tod des Cornets Christoph Rilke*. Feldpostausgabe. Leipzig: Insel-Verlag 1942, Titelseite.（筆者現物所蔵）

24）表６の典拠は表５と同じである。

25）表７の典拠も表５と同じである。

26）この数値の典拠は次の通りである。Edelgard Bühler/Hans-Eugen Bühler: a. a. O., S. 260–262.

27）表８の典拠も表５と同じである。

28）表９の典拠も表５と同じである。

29）表10の典拠も表５と同じである。

30）VB-Schriftleiter Wilhelm Utermann (Gesammelt und Hrsg.): *Darüber lache ich heute noch. Soldaten erzählen heitere Erlebnisse*. VB-Feldpost. 3. Folge. Berlin: Zentralverlag der NSDAP., Franz Eher Nachf. 1943, Titelseite.（筆者現物所蔵）

31）この数値の典拠は次の通りである。Edelgard Bühler/Hans-Eugen Bühler: a. a. O., S. 260–262.

32) Bernhard Löschenkohl: *Büchlein in der Tasche des Waffenrocks. Die Großtat der Feldpostausgaben. Nach einer Rundfrage dargestellt von Bernhard Löschenkohl*. In: *Bbl*. 170 (1943), S. 195–198, hier S. 196.

33) Ebenda, S. 197.

34) Wilhelm Haegert: *Schrifttum und Buchhandel im Kriege.* Ansprache des Leiters der Abteilung Schrifttum im Reichsministerium für Volksaufklärung und Propaganda, Ministerialdirigent Haegert, in der Hauptversammlung des Börsenvereins. In: *Bbl*. 94 (1940), S. 148–152, hier S. 150.

35) Ebenda.

36) Rudolf Erckmann: *Probleme und Aufgaben unseres Schrifttums*. Rede vor der Arbeitsgemeinschaft der schöngeistigen Verleger zur Buchhändler-Kantate in Leipzig 1941. Von Dr. Rudolf Erckmann, Regierungsrat im Reichsministerium für Volksaufklärung und Propaganda. In: *Die Bücherei*. (1941), S. 308–316, hier S. 310f.

37) Ebenda, S. 311.

38) Joseph Goebbels: *Deutsches Schrifttum im Lärm der Waffen*. Rede zum deutschen Dichtertreffen in Weimar am 11. Oktober 1942. In: ders.: *Der steile Aufstieg.* Reden und Aufsätze aus den Jahren 1942/43. München: Zentralverlag der NSDAP. Franz Eher Nachf. 1944, S. 17–29, hier S. 26.

39) Wilhelm Haegert: *Zum Dichtertreffen 1941*. In: o.V.: *Die Dichtung im kommenden Europa*. Weimarer Reden 1941. Hamburg: Hanseatische Verlagsanstalt 1942, S. 5–11, hier S. 8f. Zitiert nach Ine Van linthout: *Das Buch in der nationalsozialistischen Propagandapolitik*. Berlin/Boston: De Gryter 2012, S. 378.

40) Hans Franke: *Zum Problem des Unterhaltungsromans*. In: *Bücherkunde*. 2 (1944), S. 44–50, hier S. 50. Zitiert nach Ine Van linthout: a. a. O., S. 379.

41) Ine Van linthout: a. a. O., S. 378.

42) Wilhelm Haegert: *Schrifttum und Buchhandel im Kriege.* A. a. O., S. 150.

43) Hans Franke: a. a. O., S. 47. Zitiert nach Ine Van linthout: a. a. O., S. 379f.

44) Gerd Wunder: *Kitsch im Kriege*. In: *Bücherkunde*. 2 (1944), S. 37–42, hier S. 39. Zitiert nach Ine Van linthout: a. a. O., S. 380.

Über das Leseverhalten der deutschen Soldaten während des Zweiten Weltkriegs

— Eine Betrachtung über die Beziehung zwischen der Literaturpolitik der Nazis und der Unterhaltungsliteratur —

Ken-ichi TAKEOKA

Diese Abhandlung behandelt das Leseverhalten des deutschen Soldaten während des Zweiten Weltkriegs. Dabei wird vor allem die Beziehung zwischen der Literaturpolitik der Nazis und der Unterhaltungsliteratur betrachtet. Zu dieser Problematik wurde in der bisherigen Forschung darauf hingewiesen, dass unter den Frontsoldaten unterhaltende Lesestoffe sehr gefragt waren, und dass ihnen das Reichsministerium für Volksaufklärung und Propaganda (RMVP) bevorzugt diese Unterhaltungsliteratur lieferte. Das wird oft auch als ein Beweis des Scheiterns der nationalsozialistischen Literaturpolitik angeführt. Eine solche Ansicht wäre angesichts der harten Situation, in der die Frontsoldaten eingesetzt waren, zwar leicht verständlich. Dazu ist es nicht schwierig, in den Aussagen der Beteiligten des RMVP wie Goebbels oder in den Berichten des Frontbuchhandels entsprechende Inhalte zu finden. Besonders bekannt ist, dass der Reichsamtsleiter Walter Tießler im Februar 1942 empfahl, die Frontsendungen zu 95% mit Unterhaltungsbüchern auszustatten. Trotzdem scheint diese Ansicht nicht immer angemessen zu sein, wenn man wie folgend die Tatsachen noch genauer betrachtet.

Erstens werden die Berichte des Frontbuchhandels untersucht. Nach den zwei Verkaufsstatistiken der fahrbaren Frontbuchhandlung im Jahre 1943 und 1944 war unter den Soldaten nicht nur leichtes unterhaltendes Schrifttum, sondern auch klassische Literatur und politisches bzw. weltanschauliches Schrifttum sehr gefragt. Das zeigt, dass die geistigen Bedürfnisse der Soldaten viel ausgeglichener und vielseitiger waren.

Zweitens kommen „Buchfeldpostlisten“, die vom Werbe- und Beratungsamt für das deutsche Schrifttum des RMVP von 1939 bis 1941 herausgegeben wurden, in Betracht. Aufgrund der Untersuchung der Titel in den ersten und dritten Listen kommt heraus, dass die Listen nicht ausschließlich aus unterhaltendem Schrifttum bestehen. Auch in einem zeitgenössischen Überblick über die dritte Buchfeldpostliste wurde eingeschätzt, dass hier „auf breitester Plattform“ die Bücher ausgesucht sind, die „sich eben an alle Leserkreise und -wünsche wenden“.

Drittens werden die Feldausgabe und die Feldpostausgabe, die besonders ab 1942 durch die „Sonderaktion Feldpost“ des RMVP gefördert wurden, und die mindestens 71 Verlage herausgaben, aufgegriffen. Aufgrund der Untersuchung der Titel und der Auflagen der neun Verlage, deren Auflagen ca. 68% der Gesamtauflage einnehmen, wird wieder klargemacht, dass in der Feldausgabe und der Feldpostausgabe das klassische, nationalsozialistische und unterhaltende Schrifttum gleich wichtig sind. Hier sind besonders die folgenden beiden Punkte bemerkenswert. An erster Stelle sind die Auflagen der Autoren des poetischen Realismus wie Theodor Storm und Gottfried Keller

ziemlich hoch. Das zeigt eher eine reflektive Tendenz im Lesen der Soldaten als eine unterhaltende. An zweiter Stelle wurde die unterhaltende Schrift „Völkischer Beobachter-Feldpost“, die die höchsten Auflagen erreichte, ironischerweise vom Zentralverlag der NSDAP herausgegeben.

Viertens wird aufgrund der Aussagen von Goebbels und seinen Untergebenen Wilhelm Haegert und Rudolf Erckmann ergänzend bestätigt, dass sie mit dem Status quo der Unterhaltungsliteratur nicht zufrieden waren. Sie konnten die „flache Unterhaltungsliteratur von geringem Wert“ als Lesestoff der Soldaten nicht zulassen, und vermissten schmerzlich „den guten deutschen Unterhaltungsroman“, der mit dem nationalsozialistischen Gedanken übereinstimmt. Daher riefen sie die berühmten deutschen Dichter eifrig dazu auf, sich dieser Aufgabe zuzuwenden.

So betrachtet müsste man die bisherigen Ansichten in der Forschungsliteratur etwas korrigieren. Erstens war das Lesen der deutschen Soldaten nicht immer nur unterhaltend. Es gab eine hohe Nachfrage nach dem klassischen und nationalsozialistischen Schrifttum. Die Wichtigkeit des klassischen Schrifttums ist besonders beachtenswert, weil bisher kaum daruaf hingewiesen wurde. Zweitens ist die Ansicht über das Scheitern der nationalsozialistischen Literaturpolitik immer noch nicht zurückzuweisen. Aber nicht wegen des oben genannten Grundes, sondern vor allem weil die Wichtigkeit des nationalsozialistischen Schrifttums keinen so hohen Stellenwert hatte.

In diesem Sinne wäre es notwendig, in Zukunft über das Leseverhalten der Soldaten, die sich darauf beziehende Literaturpolitik der Nazis und die Rolle, die die literarischen Werke dabei spielte, noch ausführlich zu untersuchen.